



## 医療法人社団 満寿会 地域の医療・介護・福祉ニーズに応え、 グループ連携で安心インフラを提供



医療法人社団満寿会

理事長 小川 越史 氏

厚生労働省が公表した「2023年度 介護保険事業状況報告（年報）」によれば、全国における要介護・要支援の認定者数は708万人と、初めて700万人を突破し、過去最多を更新した。認定を受けやすい75歳以上の高齢者が増加していることや、一人暮らし高齢者世帯の増加などを背景に、65歳以上の高齢者に占める認定者の割合も19.4%と過去最高を記録している。

そうしたなか、埼玉県鶴ヶ島市で初の介護老人保健施設（老健）として1993年に開設された「鶴ヶ島ケアホーム」を中核に、外来診療、訪問診療、デイサービス、リハビリテーションなど、医療と介護を一体的に提供する総合グループとして地域を支えているのが医療法人社団満寿会だ。同法人の設立の経緯やこれまでの取り組み、地域に対する想いや今後の目標などについて、2024年4月に新たに理事長に就任した小川越史氏にお話を伺った。

### LEADER'S PROFILE

1980年5月生まれ。2000年4月、帝京大学医学部に入学。帝京大学医学部附属病院での臨床研修の後、2006年、同院の外科に入局。専門は胃や食道などの上部消化管。同年4月、帝京大学大学院に進学。2015年、板橋中央総合病院（東京都板橋区）に就職し、耳鼻咽喉科へ転向。2016年、父が設立した満寿会運営の「鶴ヶ島在宅医療診療所」の医師として地元へ戻る。2024年4月より現職。日々の生活で大切にしている考えは「負けるが勝ち」。時にはあえて相手に勝ちを譲ることで、長期的には大きな成果につなげることを心掛けている。数年前からは趣味の一環としてピアノのレッスンを受け始め、久石譲「summer」や坂本龍一「戦場のメリー・クリスマス」といった楽曲にチャレンジし、定期発表会などにも参加している。

### 3 施設体制で地域包括的に高齢者をケア

——小川理事長のご実家は鶴ヶ島で代々続く医師の家系だそうですね。

小川家では、祖父の姉の嫁先が医者だったことをきっかけに、医師家系となっています。義兄から医者になることを勧められたことで、祖父は医療の道に進むことを決めたそうです。戦時中には軍医として戦地にも赴いたりしていて、終戦後に鶴ヶ島に復員し、内科を診療科目とした「鶴ヶ島医院」を開院しています。

医師である祖父の血筋を受け継ぎ、長男で私の父・郁男と次男の公男も医師になり、父は祖父から、「鶴

ヶ島には耳鼻咽喉科の医院がないので、地域のために耳鼻咽喉科の医師になってはどうか」と言われたことで、1982年5月に「鶴ヶ島耳鼻咽喉科診療所」を開所しました。一方の叔父・公男は、祖父と同じ内科の医師になり、1985年には2代目を引き継いで、2022年まで院長を続けていました。現在は退任し、私のいところが院長を継いでいます。

——そうすると小川理事長は3代目の医師というわけですね。お父様が診療所を開所された後、介護老人保健施設「鶴ヶ島ケアホーム」の開設に至った経緯について教えてください。

長年にわたり医師として鶴ヶ島の大勢の方々に頼りにされてきた祖父ですが、晩年は認知症を患って寝たきりの状態になってしまい、その祖父の介護を



施設名/医院名	老人保健施設鶴ヶ島ケアホーム 	鶴ヶ島在宅医療診療所 	鶴ヶ島耳鼻咽喉科診療所 
サービス 診療科目概要	通所リハビリテーション（デイケア）、 短期入所サービス（ショートステイ）、 訪問看護サービス	内科、外科、 リハビリテーション科	耳鼻咽喉科
定 員	通所（92名）、入所（108名）	入院（19床）	入院設備なし
開設年月	1993年5月	2003年5月	1982年6月
所在地	〒350-2213 鶴ヶ島市脚折 1877	〒350-2223 鶴ヶ島市高倉 772-1	〒350-2203 鶴ヶ島市上広谷 8-15
受付時間	8:30 - 17:30	9:00 - 17:30 ※土曜日は12:00まで	8:30 - 17:30 ※土曜日は12:00まで

引き受けていたのが父や叔父でした。とにかく祖父の介護で大変だったのが入浴で、入浴させようとすると、祖父が「やめてくれ！」などと叫びながら嫌がる所を、父や叔父はなだめながらなんとか入浴させていました。そうした大変な思いを経験するなかで、父は「同じような苦勞をしている人はこの地域にも多いはずだ」と感じ、わざわざ遠くの病院まで行かなくても済むよう、この地域で生活できる介護施設をつくりたいと考えようになったそうです。ちょうどその当時は「寝たきり老人」が社会問題化していたようなところで、86年には法改正により、病院と自宅の中間に位置する福祉施設として「介護老人保健施設（老健）」が制度化されました。そして、その老健の運営を目的に、父は「医療法人社団満寿会」を立ち上げ、93年には鶴ヶ島市内で初となる介護老人保健施設「鶴ヶ島ケアホーム」を開設しました。

——介護老人保健施設というのは、そもそもどのような施設のことを指すのでしょうか。

老健とは、ひとことで言えば在宅生活への復帰を目指す施設ということです。あくまで在宅復帰をゴールに据えた施設であるため、入所期間は3～6カ月程度を目安としていて、病院と自宅などをつなぐ「中間施設」という役割を担っています。医療機関からの退院後すぐに自宅へ復帰するのは難しいという理由から、入所者の多くは自宅からではなく医療機関から直接老健に入所されます。

鶴ヶ島ケアホームでは、日常生活動作訓練などのリハビリテーションやレクレーション、健康チェックや訪問看護サービスのほか、家族介護者への介護指導・相談サービスなどを提供し、入所者一人ひとりの身体機能回復のためのケアを行っています。医師や看護師、作業療法士、理学療法士、管理栄養士、支援相談員、ケアマネジャーなどの専門スタッフが連携しながら、昼夜を問わず安心して生活できる体制を整えています。

——老健は在宅復帰を目指す施設ということですが、その後も継続したケアが必要になる方に対してはどのように対応されているのでしょうか。

老健で皆が元気になって退所され、再び自宅へ戻れるようになるということが理想ではありますが、現実的には皆が退所後すぐに元の生活に復帰できるわけではありません。大半のケースは、自宅へ戻っ



「鶴ヶ島ケアホーム」玄関前のペンギン像。先代・小川郁男理事長はかつて南極越冬隊員も経験しており、ペンギンへの憧憬が強い。



鶴ヶ島ケアホーム館内

た後でもさまざまな事情を抱えながら、引き続き医療的ケアを必要としています。そのため、私たちはより充実したサービスの提供が可能となる体制を整えるべく、2003年に鶴ヶ島在宅医療診療所を開設しました。これにより、満寿会の下に耳鼻咽喉科診療所、老健、在宅医療のそれぞれが地域包括的に連携してケアできる態勢が整いました。

鶴ヶ島在宅医療診療所では、その名の通り在宅診療を手掛け、自宅で療養されている方のお宅へ医師や看護師が定期的に訪問し、必要な医療を行うことを中心に、地域の「かかりつけ医」として、内科・外科をはじめさまざまな症状を外来でも診察し、19床の入院施設も有しています。症状の変化に応じて24時間いつでも医師や看護師と連絡が取れるオンコールと呼ばれる体制も整備しており、必要なときは夜間であっても訪問をして診察を行なっています。

### 在宅医療のあるべき姿を模索

——理事長はいまでも医師として在宅医療の現場に立たれているそうですが、ご自身のこれまでのご経歴について教えてください。

私はもともと在宅診療医というものを目指して医師になったわけではなく、医師を目指した当初は、例えば整形外科とか精神科といった診療科目を専門にしようと考えていました。当時はあまり人の生死に直接関係するような診療科目は自分には向いていないというか、関わるべきではないというような考

えを自分では持っていたからです。ただ研修医時代にさまざまな診療科を回るスーパーローテーションの過程で、実際に患者さんの生死に関わる重要な場面に直面することで、そうした考えが少しずつ変わっていき、研修後は胃や食道などの上部消化管を専門としました。

その後、大学病院での勤務で私が担当したガン患者のなかに、放射線治療など施したものの、その後再発してしまい、それ以上の治療が難しくなってしまった高齢の方がいました。その患者のご家族の方からは、「この先はもう自宅では看られないので、入院を続けさせてほしい」と懇願されたため、担当医として私の判断で最期の看取りまで入院を続けてもらったのですが、大学病院なのに何の治療も施さず入院だけが続けるという対応について、病院内の一部で反発の声があがってしまいました。大学病院というところは、基本的に積極的な治療による完治を目指すところであり、最期を看取る終末期医療の場ではありません。もちろん私もそのことは理屈では分かっていたのですが、終末期医療や看取りの在り方について勤務医としていろいろな葛藤を経験しました。

——鶴ヶ島にはいつごろ戻られたのでしょうか。

その後、鶴ヶ島在宅医療診療所で医師の欠員を補充しなければならないという話があり、2016年に私が鶴ヶ島に戻ることにになりました。在宅医療では、月に数回の訪問診療のほか、急な病状変化の際の訪問看護や必要に応じての往診なども行っていて、私が戻ってからは24時間365日、ずっと私ひとりです。オンコール体制をこなすという状態が7年間続きました。現在ではほかの医師も在宅診療を担当してくれていますが、基本的には私が中心となって在宅医療に取り組んでいます。

在宅医療を行ううえでは、患者さんご本人とご家族の理解や協力が欠かせません。在宅では点滴ひとつとっても、パック交換や異常時の連絡などにご家族の協力がないとできませんし、患者をトイレに連れていくにも手伝ってくれる人が必要となります。今はもう世の中がだいぶ変わってきましたが、私が在宅医療を始めた当初は、在宅医療に対する世



の中の知識や理解はまだまだ低かったのです。私がご家族に「お家にまた戻ってこられて良かったですね」と声をかけると、ご家族からは「全然良くありませんよ。病院から退院してくれて言われたから仕方なく帰ってきたんです」というような悲しいやり取りをすることもよくありました。大きな病院であっても在宅医療についてよく理解していない医師がいて、ご家族にしっかりと説明をできていないようなケースは多かったです。

### グループ連携図り、地域ニーズに応えるサービスを提供

——理事長の在宅医療でのご経験を通じ、セミナーや勉強会では講師などもされているということですが、どのようなテーマに取り組まれているのでしょうか。

医師としてどんなに手を尽くしても、治してあげられないことはどうしてもあります。そうしたとき、医師としてできることは何か、いろいろと自問自答するようになり、そうしたなかで今とくに大切にしているのがACPという取り組みです。ACPとは、アドバンス・ケア・プランニング(Advance Care Planning)の略で、もしもの時のことを家族や信頼する人、医療・介護関係者たちと話し合い、共有することを意味し、「人生会議」とも言われています。前もって自分自身で「入院はせず、できるだけ家で過ごしたい」「抗がん剤は、つらくなければ続けたい」「人工呼吸器や胃ろうなどの延命治療は絶対にやりたくない」といったさまざまな考えを共有しておくことで、人生の最終段階で最期まで自分らしく生きることができます。考えは自分の置かれている状況や病状、周囲の環境などによっても変化していくものなので、繰り返し話し合うことで、残された家族等がのちに抱えるかもしれない「この選択でよかったのだろうか」といった心の葛藤を減らすことにもつながります。この取り組みは現在、国も推奨していて、私も地域での医療関係の研修会や勉強会、看護学校等での講演会などで積極的に皆さまにお話しさせてもらっています。

——別法人では特養も運営されているそうですね。



鶴ヶ島在宅医療診療所

やはり介護も医療も地域に支えられて初めて存続することができるものです。私が鶴ヶ島に戻ってきたとき、祖父の代からよく知っている地元の方々などからは、「また戻ってきてくれたんだね」「これで安心だ」といった喜びの声を聞く機会があり、地域のニーズに合った求められるサービスや安心感を提供していくことが何より大切だということに改めて気づかされました。

父は地域包括ケアシステムをより充実させるため、老健とは異なり高齢者の終の棲家ともなり得る特別養護老人ホーム(特養)の必要性を感じ、特養を運営する別法人として「社会福祉法人忠黎会」を2015年に設立しています。2017年には鶴ヶ島ケアホームから車で5分ほどの場所に80のユニット型完全個室を擁する特養「鶴ヶ島ほほえみの郷」を開設し、一人ひとりの思いに寄り添った暮らしを支援しています。老健と在宅医療の診療所を持つ満寿会、そして特養を持つ忠黎会という総合的な介護・



鶴ヶ島耳鼻咽喉科診療所



鶴ヶ島ケアホーム

医療サービスを提供できるグループを形成していることが私たちの一番の強みであり、その強みをフルに活かしていくことで鶴ヶ島という地域のニーズに応えられているものと考えています。

——医療・介護業界は高齢化を背景にニーズが拡大を続けていますが、今後はどのような展望をお持ちですか。

私たちの事業というのは、医療・介護という社会的ニーズの高い事業ではありますが、公定価格で運営されているため、近年の賃金・物価上昇の影響などを価格転嫁できず、そのうえ人口減少による労働者不足のなかでの慢性的な人手不足も深刻な課題となっており、業界全体はいま厳しい経営環境に直面しています。日々患者や利用者を支えている職員の心理的、身体的負担も大きいのが実情です。

いまはまだ高齢者人口が増え続けている状況で、医療・介護に対するニーズも高い状態が続いていますが、これが2040年代になれば、団塊ジュニア世代がすべて高齢者となり高齢者人口もいよいよピークを迎えるため、そうなると、医療・介護業界の生き残り競争もより厳しいものになっていくでしょう。そうなったとき、私たちがこの地域で生き残っていくためには、より深い地域とのつながりが大事になってくると思います。

例えば、この地域には特産品のひとつに、高価な香辛料で知られるサフランがあり、実はこのサフランに含まれる成分は、脳に作用し、認知症やうつ病の改善効果が期待できるという研究があります。実

際にサフランライスをよく食べているインドのある村では、認知症が極端に少ないといった報告もあり、このサフランと健康とをうまくマッチングさせ、地元の農業や商工会などとも連携を図っていくことで、何か地域に貢献できることはないかといったことをいま模索しています。介護や医療を軸に、幅広い産業と関わることで、何か新しい価値を地域に還元していくことができると考えています。

### 職員全員の心身の健康が第一

——健康経営優良法人の認定を受けられているということですが、どのようなことに取り組んでいるのでしょうか。

私たちは医療・介護の両面から地域の皆さまを支える法人として、何よりもまず職員の健康を第一に考えており、そのため「健康経営」への取り組みをグループ全体で進めています。何か特別に難しいことに取り組んでいるということではなく、具体的には、定期検診の受診率の向上やストレスチェックの実施、過重労働防止の推進や社内コミュニケーションの促進などを進めており、経済産業省の「健康経営優良法人」にも認定されました。職員が気持ちよく働き、いつも笑顔でいることが、皆さまに質の良いサービスと安心感を届けることにつながるため、職員の心身の健康に目を向け、気を配りながら、持続可能な経営を実現させていこうと考えています。

医療・介護の職員はやはり女性が多数派であり、



私たちの現場でも幅広い年代の女性職員たちが大きな戦力として、子育て中の方やブランクのある方なども含め、皆さんがそれぞれの役割で活躍してくれています。管理職への登用などではまだまだ課題が多い部分もありますが、仕事と家庭を無理なく両立し、女性一人ひとりが安心して長く働けるよう、育児休業や介護休業の取得促進、復職支援、時短勤務や時間単位有給休暇の利用など、多様な働き方を実現できる環境を整えています。

——最後に、改めて今後の取り組みについての目標を教えてください。

2024年4月には私が理事長職のバトンを父から受け継ぎ、新しく理事長に就任しましたが、これから取り組むべき課題はまだたくさんあります。これからも地域医療福祉に貢献し続けるために、何をどうすべきかということをいろいろと模索しているところです。時代の変化とともにやり方を変えていかなければならないこともありますので、祖父や父がこれまでに築き上げてきた想いを受け継ぎながら、より多様な視点やテクノロジーの進化などもうまく取り入れながら、職員一同が一丸となってこの鶴ヶ島の医療・介護・福祉に貢献し続けてまいりたいと考えております。

私たちの根底には、この鶴ヶ島を人々が年老いても安心して豊かな老後が送れる地域にしたいという強い想いがあります。引き続き、「地域のために、徹底的に！」という当法人の理念のもと、お子様からお年寄まで地域の皆様に信頼される医療・

取材後記

武蔵野銀行 坂戸支店

北森 啓也 支店長



医療法人社団 満寿会様は、1982年の創業以来、40年以上にわたり地域社会の健康と安心を支える医療機関として、多くの患者さまやご家族に寄り添いながら、地域の信頼を着実に築いておられます。

高齢化が進む地域を見据え、一般診療のみならず予防医療・在宅医療・リハビリテーションなど幅広い分野で地域医療体制の強化に取り組み、関連法人では特別養護老人ホームやデイサービスを運営するなど、「医療と福祉の連携による地域包括ケア」の実現に向けた中核的存在となっております。また、「地域とのつながり」も大切にされ、地元自治会や学校との連携を通じた健康講座の開催や地域イベントへの協賛、医療相談会の主催など、医療の枠を超えた取り組みを通じて地域全体の健康意識を高める活動にも尽力されております。

当行は、長年にわたり親密なお取引を賜っており、今後も医療・福祉の両面から地域を支えるこうした取り組みを末永くサポートさせていただき、持続可能な地域社会の実現に向けて共に歩んでまいります。

介護サービスを提供することで、一人でも多くの人を笑顔で元気にしていくことを目標にしております。



## ■医療法人社団 満寿会 概要

法人所在地：埼玉県鶴ヶ島市脚折 1877

創業：1982年5月 従業員数：250名

運営施設：「鶴ヶ島ケアホーム」（埼玉県鶴ヶ島市）

TEL：049-271-5121 FAX：049-271-5124

「鶴ヶ島在宅医療診療所」（同）

TEL：049-287-6519 FAX：049-287-8471

「鶴ヶ島耳鼻咽喉科診療所」（同）

TEL：049-286-3387 FAX：049-286-3388

<https://www.manjukai.or.jp/>

（取引店）武蔵野銀行坂戸支店